

なぜ酒を入れるのか

漆喰の〈レシピ〉

漆喰(しっくい)は古代から壁の仕上げに使われた左官材料で、主要原料は消石灰です。消石灰は、石灰石や貝殻を焼成・消化して作られます。石灰はクセとってアクが強く亀裂が入りやすいため、漆喰では消石灰を使用するとい、「姫路城昭和の大修理」では、貝殻を焼成・消化して作った貝灰を消石灰に混ぜて使用しました(加藤得二「城の壁」、『日本の壁』INA BOOKLET Vol.5 No.2、INAX、1989所収。「石灰」とは生石灰と消石灰の総称だが、加藤は生石灰の意で使用)。これに、麻や紙の苧(すさ。「つた」とも言う)と海藻を煮出してできた糊(のり)を混ぜて練りあげたものが漆喰となります。つまり、漆喰とは消石灰を主原料とし、補助材として苧、糊を混ぜ合わせてできたもの(山田幸一『壁』法政大学出版局、1981)と定義できますが、麻や紙の苧ではなく藁を混ぜるもの(土佐漆喰※1)や、補助材に砂や土、油を加えることもあり、いろいろとバリエーションがあります。貝灰では耐火性に劣るため、蔵には石灰を使うのだと、主原料による使い分けの理由を説明した文献もありますが(「重修本草綱目 啓蒙五」、『古事類縁』金石部所収)、こうした補助材を加える理由は必ずしも明らかになっていません。漆喰につのまた(角又)の糊を混ぜるのは漆喰を白くするためと言う職人も存在しましたから(「力田均(1901年生)きき書き」、岩本由輝『きき書き六万石の職人衆』刀水書房、1980所収)、経験上、出来栄えや耐久性(「左官職人・浅原雄三が語る、白に宿るもの」INAXライブミュージアム『日本の白い壁』LIXIL出版、2012)、施工の容易さ(加藤前掲)、施工する部位(※2)などを考慮して、補助材が選択されていたのでしょう。

そんな補助材として、職人の経験をしていまい一つよくわからないものが酒です。たとえば、『愚子見記』では、「亦(漆喰;筆者註)屋根裏杯上ケ塗漆喰」の材料として、

石灰:8升、海羅(ふのり):50目、苧苧:80目、紙苧:10匁、楠10匁、油:5匁、酒5匁

となっています。同書「御多聞廻之壁」の項では壁1坪の材料として、

白土:7升宛、紙苧:弘糸35枚、海羅:60目宛、油酒:3匁

※1;典拠は明示しないが(橋詰延壽『土佐石灰業史』土佐石灰工業組合、1942か)、高知県における石灰の焼き始めは、寛文5年(1665)に当時の土佐藩主が紙屋太兵衛と猿屋久右衛門に試験的に焼かせたことから、本格的な生産開始は享保14年(1729)だとされる(藤田洋三『鏝絵放浪記』石風社、2001)。これが正しいければ、土佐漆喰は、江戸中期以降の比較的新しいものの可能性がある。また、厳密に言えば、土佐漆喰では糊を使わないので、一般的な漆喰とは異質ということになる。

とあり、上塗り以外の壁材にも酒が使用されていたようです。『愚子見記』のような建築史の基礎史料に載っているにもかかわらず、壁材に酒を使う理由や役割は不明ということで、全国文化財壁技術保存会の会員に尋ねても、具体的な使用事例はわからないとのこと。

ところで、仙台文庫の『御普請方留』(今野印刷、2002)中巻、「壁塗工数并中塗土白土等拵様之事」の項には、白土1坪分の材料として、

牡蠣灰:5升、ふのり:120目、下酒:6匁、水油:3匁、紙苧:7匁5分

とあります。下酒(低級の酒か)を漆喰の材料にしています。ここでは「白土」とありますが、左記の定義からすれば、漆喰のこととみていいでしょう。余談になりますが、歴史用語としては「漆喰」と「白土」は同義で、「白土」の場合は白粘土を指す場合もあるとのこと(上田耕三氏のご教示)。また同じ項で練砂利1坪分の材料として、

石灰:1石、砂利:5升、ねば土:3升、にか塩:3斗5升、油:3合、酒:2合

とあり、ここでも酒があがっています。練砂利は、漆喰のような仕上げ材とは異なり、コンクリートのようなものとみられます。

たまたま見つけた記事では、『大村見聞集』(高科書院、1994)の「しゅっくい(漆喰)拵」には、

石灰:1斗5升、ふのり:90目、苧苧:2升、荏ゴマ油:1合5匁、酒:1合5匁

とあり、材料の割合からすると『愚子見記』の上ケ塗漆喰と近似します。

このように、漆喰に酒を補助材として混ぜる事例があったことは間違いがありません。しかし、確認できた事例が少ないため、酒の使用がそもそも特殊だったのか否かを判断することができません。近世では使用されていたのに、現代ではあまり知られなくなった理由も知りたいところです。

今後、酒使用の事例を集めていきたいと考えていますので、もし、これに関する資料や情報(「今でも使ってるよ」とか「○○○のために混ぜるのさ」なんて情報でも)をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どうかご一報ください(kyo-jyokaku@city.himeji.lg.jp)。研究室のホームページのメールアイコンから送ってくださっても結構です。よろしくお願いします。

※2;藤田洋三氏は前掲書で、明人が伝えた技法として大仏漆喰(油礮漆喰)を紹介し、南蛮漆喰のルーツだとする。そして、『多聞院日記』天正14年(1588)3月17日条の「油并石灰入、一段堅久可在之処也」を引用しつつ、これが石灰に菜種油を混ぜて硬化度を高めた大仏漆喰の技法を示すとして、こうした渡来人の技法が江戸時代の塗り込め建築に影響を及ぼすと見通したが(藤田洋三、西山マルセーロ「左官技術における石灰の使用に関する歴史的考察」、『竹中大工道具館研究紀要』16、2004)、この記事は17日当日の降雨による築地工事の延引とその間の瓦葺材料の用意を記したもので、その材料が屋根目地用漆喰の可能性はあるものの、大仏漆喰の技法にまで言及できる記述ではない。

